



| | |
|--------------|---|
| Title | 情動・認知の誤帰属と処理の順序性 |
| Author(s) | 山田, 歩 |
| Citation | 対人社会心理学研究. 2001, 1, p. 171-184 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/10775 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

情動・認知の誤帰属と処理の順序性

山田 歩 (大阪大学大学院人間科学研究科)

誤帰属は、情動経験から認知的な経験まで、人間の心理現象に広く見られる。それは、様々な心理現象に伴う内的な感覚が、意識が接近できない潜在的過程から産出される直接的な結果であることと関係する。この主観的経験の源泉に対する無知は、感情経験や認知的な判断にバイアスをもたらすひとつの準備となるのである。本稿では、直接的な内的感覚をモニターし、その源泉を推測し、それを説明付けるメタ認知の働きに焦点を当てながら、広範囲にわたる誤帰属研究を概観する。情動経験の誤帰属、利用可能性ヒューリスティック、知覚的流暢性誤帰属をとりあげ、その中で主観的経験とそのメタ認知が重要な役割を果たしていることを確認した後、感情先行説の実験的証拠であった単純接触効果を認知的な誤帰属として扱う際に生じる争点およびその展望を論じる。

キーワード：情動の誤帰属，利用可能性ヒューリスティック，知覚的流暢性誤帰属，単純接触効果，処理の順序性

情動・認知の誤帰属

潜在的過程がもたらすもの：誤帰属 決定と行為の多くは、意識がアクセスできない潜在的過程の直接の結果である。われわれは自分自身の言動の真の原因に関し意識的に直接接近することはできず、それらは推論的に構成される。Bem(1972) は、内的な手がかりが弱く、曖昧なとき、自分自身の態度や情動といった内的な状態が、自分の行動とそれが生起した状況の観察を通して推測されるとし、自己知覚が他者知覚と同様な推論のプロセスに支えられていることを主張した。そして、顕在的思考を通して推論がなされた場合でさえも、これが正確な内観報告をもたらすという保証はない。Nisbett & Wilson(1977) では、私たちは自分の行動の原因を正確に知らない場合でも、質問されれば、もっともらしい回答をするが、それは正確ではないことが示された。また、近年では、態度・自尊心・ステレオタイプといった社会心理学的概念が、自己報告型の測度では十分に測定できないこと(Greenwald & Banaji, 1995) や、古典的な認知的斉合性理論が、顕在的な過程よりもむしろ、潜在的な過程を説明するモデルとしてふさわしいことが示されている (Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellot, in Press)。社会的脈絡の中での決定や行為を支えるメカニズムの多くは自律的に機能し、その出力にのみわれわれはアクセス可能であり、その隠れた過程に対しては顕在的な思考を通して推測するしか手立てはないのである。そして、このような見解は、「人は自分で思っているほど、自分の心の動きをわかってはいない」(下條, 1996) という一見常識に反する主張を導く。

行為や決定の源泉に対する無知とその結果である源泉に対する推測のエラーは、思考や感情にバイアスをもたらす。このような現象の多くは、「誤帰属」として研究されてきた。誤帰属は、情動経験から認知的な経験まで、人間の心理現象に広く見られる傾向であり、これは、われわれが、認知・感情を問わず、自動的に産出される経験の源泉をさまざまに推測しながら、複雑な判断を下し、環境に適応しているということの証拠であると考えられる。本稿では、内的感覚をモニターし、その源泉を推測し、それを説明付けるメタ認知の働きに焦点を当て、広範囲にわたる誤帰属研究を概観する。情動経験の誤帰属、利用可能性ヒューリスティック、知覚的流暢性誤帰属をとりあげ、その中で主観的経験とそのメタ認知が重要な役割を果たしていることを確認した後、感情先行説の実験的証拠であった単純接触効果を認知的な誤帰属として扱う際に生じる争点およびその展望を論じる。

主観的経験の誤帰属 近年、主観的経験(subjective experience)とそれをモニターするメタレベ

ルでの認知の働きが、われわれの決定や行為の様々な側面で、重要な役割を果たしているということが、広く論じられている(Strack, 1992; Clore & Parrott, 1994; Strack & Bless, 1994; Schwarz & Clore, 1996; Schwarz, 1998; Strack & Förster, 1998; Chen & Chaiken, 1999; Bless & Forgas, 2000; Skurnik, Schwarz & Winkielman, 2000)。主観的経験には、ムードや情動といったエモーショナルな感覚から、検索・想起の容易さや熟知感といったノンエモーショナルな感覚まで含まれ、その経験が個体にもたらす情報価値は、それらがどのように解釈されるかにより変わり、その後の決定や行為に異なった影響を与えるとされる。このような主張は、情動経験と認知的経験を、主観的経験として一括することで、情動の誤帰属、感情情報機能説、利用可能性ヒューリスティック、知覚的流暢性効果など広範囲にわたる研究領域で得られた知見を統一的に説明する試みである。

Schwarz & Clore(1996)は、感覚(feeling)を広く捉え、痛みや飢えといった「身体感覚」や悲しみや恐れといった「情動感覚」の他に、記憶や推理に伴う「認知的感覚(cognitive feeling; Clore, 1992)」も含め、これらの主観的経験が情報としての機能をもつということと、われわれはそうした感覚を経験するとその源泉を探索するように動機づけられるということを論じた。瞬時に生み出される感覚は、意識的コントロールの関与しない潜在的プロセスの直接の結果であり、その原因あるいは源泉に関する情報を含まないの、直接的な感覚経験のあとに、その源泉を探索する段階が続くのである。身体のある部分が痛ければその原因を見つけ、それを除去し、悲しければその原因に対処し、ある対象に既知感を覚えればその由来を遡るのである。すなわち、ある対象から主観的に受け取る感覚は、なんらかの情報を内包しており、われわれはその含意を自発的に推測することを通して外界に適応していくのである。

主観的経験の源泉が探索される段階において、特に Schwarz らが強調しているのは、自分の内的な経験をモニターするメタ認知あるいはその経験を説明するヒューリスティック¹⁾の働きである。ヒューリスティックとは、ある種の経験と当面の対象の関係を説明し、両者を結びつける働きをになう、手続き的・宣言的知識である(Chen & Chaiken, 1999)。主観的経験に対してわれわれは、どうしてそのように感じられるのか、それを説明する知識を長期記憶内から検索し、その解釈に適用するのである。

情動感覚の誤帰属²⁾

われわれは、自身の感情状態の源泉に対して自覚的ではなく、むしろ陰に陽に方向付けられた主観的状态の理由を、内外のもっともらしい手がかりから推測する傾向がある。そして、推測された原因が現実のそれと一致していないときに、バイアスのかかった感情経験が構成される。このような情動やムードの源泉に対する無知は、誤帰属のパラダイムを使った多くの実験で示された。

古典的研究 Schachter & Singer(1962)は、情動経験が推論的過程の産物であることを示した。アドレナリンの注射によって自らの生理的喚起が高められたことを知らない被験者は、身体の生理的変化の説明を周囲の環境から求めたため、その環境の性質が愉快であれば、愉快的な情動を経験し、怒りを示すような性質を有すれば、怒りの情動を経験した。情動経験の質と強度が、帰属のされ方によって、柔軟に変化するという彼らの主張は、その後多くの研究を刺激し、感覚の帰属が判断や行為に決定的な役割を果たすことが示された(Storms & Nisbett, 1970; Zillman, Katcher, & Milavsky, 1972; Schwarz & Clore, 1983; レビューとしては外山, 1990 を参照)。

Storms & Nisbett(1970)の研究では、不眠症患者は興奮状態を無関連な偽薬に帰属させることで早く寝付くことが示され、Zillman et al.(1972)は、攻撃的な挑発を与えた後で激しい運動をさせると、軽い作業をさせた場合よりも、後のセッションで、相手に強い報復的行動を行うということを示した。つまり、身体的運動による生理的興奮が、相手への怒りに加算され、その感情を強めたのである。また、Schwarz & Clore(1983)では、その日の天候が源泉であるムードから、自分自身の人生全般に対す

る満足感が推測されることが示された。自分自身の人生全般に対する満足感を訊ねられた者は、それを推測するのに、質問に先行していた気分状態を情報として利用したのである。すなわち、自分自身の感情状態の源泉に対する無知のために、先行する感情状態を、質問に対する反応の結果であると誤って認識してしまったのである。しかし、感情経験が天候に帰属されるように質問が構成されると、回答者はその時のムードを利用し満足感を推測することはしなかった。ここから、感情の源泉は常に自覚されているわけではなく、それが特定されていない場合、他の無関連な判断の材料に取りこまれてしまうことがあることが伺える。

閾下での態度の条件付け 閾下での感情プライミングを用いた実験は、先行刺激に対する意識的な気づき (awareness) を排除する。主観的な状態の源泉を知らない被験者は、その状態の理由を、もっともらしい手がかりから推測することとなる。例えば、Murphy & Zajonc (1993) では、被験者は、閾下プライミングに続いて呈示される漢字の好ましさについて評定した。プライミングでは、笑いあるいは怒りが表出された顔刺激 (感情誘発条件) か、図形 (ニュートラル条件) がプライムされた。結果、笑顔がプライムされた直後に呈示された漢字に対して最も好ましいという評価がされ、怒り顔がプライムされた直後に呈示された漢字に対してはもっとも低い評定がなされた。ニュートラル刺激がプライムされると、その評定は両者の中間に収まった。しかし、プライミングが閾上でなされると、そのようなパターンは得られなかった。すなわち、プライミングが閾下でなされたとき、被験者は誘発されるポジティブあるいはネガティブな感情経験の源泉を特定することができず、感覚の源泉を漢字に帰属してしまったが、プライミングが閾上でなされると、主観的感覚の源泉の混同が避けられたのである。

ある感情が、対象に対する本当の反応を示しているならば、それがもたらす情報は、適切で適応的な感情経験をもたらす。しかし、他の無関連な源泉によって生じた感情を、当面の対象への反応であると誤って認識すると、バイアスのかかった感情が導かれるのである。

認知的感覚の誤帰属

認知的感覚とは、推理や記憶などの情報処理に伴う主観的な経験である。情報の検索しやすさや情報の処理しやすさといったノンエモショナルな感覚のあるものは、それらが潜在的なプロセスを通して産出されるので、われわれはそういった感覚を生起させた原因を意識的にさかのぼって知ることができない。それは、われわれが、その原因を誤ったところに求めてしまう可能性をもたらす。

検索・想起の容易さ われわれは、日常生活において、熟慮的な思考ではなく、直観に頼ってさまざまな判断や決断を下していることが多い。絵の美しさを評価するときや、将棋のある局面で効果的な手をさすときや、あるいは、ある人が何かをしたとき、その行為が正しいのかどうか判断するとき、直観に頼ることがある。直観的判断が行使できず、あらゆる意思決定課題を前に、顕在的思考によってのみ立ち向かうとなると、われわれはたちまち、日常生活に支障をきたし、不適応を起こしてしまうであろう。前頭葉腹内側部に損傷を負った患者は、再診の日取りを決めるという些細な意思決定でさえ、ほとんど無駄ともいえる時間と労力を費やし、あらゆる可能性を理性的に吟味し、決定を下そうとした (Damasio, 1994)。ここから、直観に頼った判断は、日常生活に適応するために必要不可欠な心理学的機能の 1 つであり、熟慮的な判断とは別種のプロセスであることが伺える。

直観的判断は、認知心理学や社会心理学において広く研究されてきた。統計的判断や確率判断は、Tversky らの中心的な研究であったが、一連の研究で、ある出来事の生起頻度や確率が、直観的に推測されることが明らかとなっている。彼らは、ヒューリスティックが作用するのが、意識レベルなのか無意識レベルであるのかについて明確に論じてはいないが、そもそも「直観」とは、意識に送られてきた処理の最終結果に対する経験であり、潜在的なプロセスがこのような迅速な処理を支える基盤であるということは広く受け入れられている (信原, 2000; Evans & Over, 1996)。

近年、直観を一種の感覚と想定し、彼らのヒューリスティック研究を、その非内観的側面をふまえ、誤帰属研究のパラダイムに位置付ける研究が増えている (Strack, 1992; Schwarz, Bless, Strack, Klumpp, Rittenauer-Schatka, & Simons, 1991; Schwarz & Clore, 1996; Schwarz, 1998; Wänke, Schwarz, & Bless, 1995)。

われわれは、ある出来事の生起頻度や確率を判断する際、しばしば、具体的な事例をいくつか思い浮かべ、それにもとづいて判断する。そのとき事例が思い浮かべやすいほど頻度や確率が高く判断される傾向がある。これを利用可能性ヒューリスティックという。Tversky & Kahneman (1973; Exp3) では、r で始まる単語は、r が3番目の単語よりも、その数が多いと判断されることが示された。最初の字が r の単語の方が検索しやすかったために、3文字目が r の単語よりも多いと判断されたのである。同じように、Tversky & Kahneman (1973; Exp8) では、19の有名な男性名と20の有名な女性名が記載されたリスト (19の有名な女性名と20の有名な男性名のリスト) を読んだ被験者は、男女どちらが多く呈示されたかを問われると、男性名 (女性名) がより多く記載されていたと誤った判断をした。有名な名前のほうが、記憶内での利用可能性が高く、検索されやすかったため、その全体としての数が、その想起経験から多く推測されたのである。

しかし、これらの実験から得られた結果から、想起に伴う主観的経験が判断に決定的な影響を与えていたとは断定できない。というのも、単純に、想起された事例数の多さから、その頻度が高く判断されただけかもしれないからである。すなわち、想起経験と想起事例数のどちらが重要なファクターとして機能するのか決定するにはこの結果は不十分であった。

Wänke *et al.* (1995) はこの点を明確にするために上述の実験をより洗練させた形で追試した。彼らは、t で始まる単語と t が3番目の単語を想起させ、その頻度評定をさせたが、そのとき、事例数を統制するために、それぞれ10語ずつ白紙に書き出させた。それにもかかわらず、結果では、t で始まる単語の方が頻度が高いと判断された。つまり、想起量ではなくその経験が利用可能性ヒューリスティックに重要な役割を果たすということをダイレクトに示すことに成功したのである。さらに、彼らは、書き出し用の紙を青色に変え同様の実験を実施したが、そのとき、その背景色が想起を促進する効果があると教示する群と、抑制効果があると教示する群とに被験者を分けた。結果、単語の思い浮かべやすさを背景色の促進効果に帰属した群は、コントロール群と比べ、t で始まる単語の生起頻度を低く見積もった。逆に、背景色が想起を妨害すると教示された被験者は、コントロール群と比べ、t で始まる単語の生起頻度を高く見積もった。想起の容易さに関する経験の情報価値が、前者では割り引かれ、後者では割増しされたのである。この一連の実験から、利用可能性ヒューリスティックは、想起された事例数ではなく、想起の際の主観的経験が重要な役割を果たすということと、主観的経験のもつ情報価が、帰属操作によって変わりうるということが明確となった。

また、検索の容易さは生起頻度や確率の判断に利用されるばかりでなく、自分自身の行動傾向を推測する際にも拠り所となる (Schwarz *et al.*, 1991)。彼らは、自分が主張的 (非主張的) に振舞った出来事を、6事例 (容易条件) あるいは12事例 (困難条件) ずつ被験者に報告させた後、彼ら自身の行動傾向を推測させた。6つの非主張的な行動事例を想起した後よりも、6つの主張的事例を想起した後のほうが、自分をより主張的であると判断した。しかし、12の非主張的行動事例を想起した条件と12の主張的行動事例を想起した条件での比較では、想起事例数の増加にもかかわらずその差が大きくなることはなかった。一方、主張的な事例を想起した場合、6事例条件の方が、12事例条件よりも、自分のことをより主張的であると判断した。同様に、非主張的な事例を想起した場合、6事例条件の方が、12事例条件よりも、自分のことをより非主張的であると判断した。つまり、想起事例数の増加が直接的に判断に影響を与えることはなく、そこで経験される想起の容易さ・困難さが判断を大きく左右す

ることが一貫して確認された。この一連の結果から、想起経験が、想起事例数よりも、判断の基礎となりうる事が確かめられた。

さらに, Schwarz *et al.* (1991, Exp3) は、帰属の操作を加え同様な手続きの実験を実施した。すなわち、事例を想起させる際にバックミュージックを流し、それが想起を促進する効果があると教示する条件と、抑制する効果があると教示する条件とをもうけた。結果、想起の容易さに関する経験が音楽による効果に帰属されると、もはや想起経験に頼った行動傾向に対する推測はなされず、想起した事例数から行動傾向が判断された。主観的経験が判断に影響力を発揮するのは、その情報価が損なわれていないことが条件となってくる。その経験の源泉が他に帰属されると、その情報としての診断性が失われ、別の形で判断がなされることとなるのである。

統計的な判断のみならず、自分自身の行動傾向を判断する際にも、事例の想起しやすさは、その源泉がどこに帰属され、どのように説明されるかによって、その後の推論に与える影響が異なることから、そこには、メタ認知的なプロセスが大きく関与していることがわかった。検索の容易さを経験した時、被験者はその感覚を「簡単に思い出せるのは頻度が高い出来事である」と推測し、*t* で始まる単語は *t* が 3 番目の単語よりも多いと判断した。また、自分が主張的に振舞った事例を 6 つ想起した場合、12 の事例を想起した場合と比べ、想起が容易であり、その感覚は「簡単に思い出せるのは自分がそのように振舞う頻度が高かった」と推測された。さらに、そのような想起経験が紙の色のせいにされたり、音楽を聴くことから得られる経験として説明されると、*t* で始まる単語が多い、あるいは自分が主張的であるという判断をすることはなくなった。すなわち、主観的な経験が判断にどのような影響をもたらすかは、それをモニターし解釈するメタ認知の働き、つまりそこで適用される知識や信念に依存するのである。

処理の容易さ 認知的経験の他のタイプとして、所与の情報を処理する際に体験される「処理の容易さ」がある。そして、ここでは潜在記憶からの影響が顕著となる (Jacoby & Kelley, 1987; 池上, 1999; Toth, 2000)。以前に知覚した刺激は、そうでない刺激と比べ、簡単に知覚・処理されるが、これは、事前接触により、対象の知覚的属性が記憶に残り、再びその対象に接触したとき、その記憶情報が無意識的に利用され、知覚的コーディングなどの認知的処理効率 (流暢性) が高められたからである。特定刺激への反復接触は知覚的流暢性 (perceptual fluency) の増大をもたらす、それは「どこかで見たことがある」という熟知感 (familiarity) を被験者にもたらす。そして、この熟知感、名前が有名に思える、ステイトメントが真実らしいといった様々な判断の材料として利用されるのである。過去経験の関数として課題のパフォーマンスはより流暢になるが、被験者は、熟知感を過去経験以外の源泉 - 有名性・真実性といったターゲットの属性 - に求め、判断にバイアスをかけてしまうことが多くの研究で示された。潜在記憶の効果が、外的刺激の属性へ、誤帰属されるのである。

Jacoby, Kelley, Brown, & Jasechko (1989) では、知覚的流暢性によってもたらされる熟知感が、誤って人名の有名性に帰属されることが示された。最初のセッションでは、有名な名前と有名でない名前がそれぞれ含まれたリストを与えられた被験者は、その名前の発音のしやすさを評定することを通し、それらの名前に事前接触した。直後あるいは 24 時間後に行われた第 2 セッションで、被験者は、呈示される名前の有名度を判定した。そのとき呈示された名前は、新たに呈示される有名・非有名の人名 (New 条件) に加え、最初のセッションで呈示された有名・非有名な名前 (Old 条件) がそれぞれ混入された。結果、直後に判断が求められた場合、New 条件の非有名な名前にも、Old 条件の非有名な名前にも、同等の有名性判断がされたが、24 時間後に判断が求められた場合、New 条件の非有名な名前と比べ、Old 条件の非有名な名前に対して、より有名であるという判断がされた。すなわち、24 時間後に評定をした時、最初の発音評定課題で特定の人名に接触していたというエピソード記憶が

減衰していたので、2 度目に接触した人名に関して感じた熟知感の源泉が過去記憶に帰属されず、そもそもその名前が有名であることに帰属されたのである。

Banaji & Greenwald(1995)は Jacoby *et al.*(1989)の手続きを応用し、有名性判断におけるジェンダーバイアスを検証した。すなわち、彼女たちは疑似有名性の効果が、名前の性別を超えて一様に得られるかどうかを、Jacoby *et al.*(1989)と同様の手続きを通して検証した。全体として、Jacoby *et al.*(1989)と同じく、非有名な名前に対しては、事前接触によって熟知感の高まった名前がより有名だと判断される傾向が見られたが、個別的に分析すると、その効果は、非有名な女性名ではなく、非有名な男性名において選択的に得られるということがわかった。

つまり、熟知感が高くその源泉が不明瞭である名前が有名であるかどうか訊ねられるときにはいつも、有名であるという判断がなされるわけではないのである。ここからは、処理効率に関する感覚のメタ認知が主観的判断に取り込まれる際に、ある種の制約が働いていることが示唆される。Chen & Chaiken(1999)は、主観的経験が選択的なバイアスを与えている研究を概観し、ヒューリスティックの判断対象への適用可能性 (applicability; Higgins, 1989, 1996 参照) の差異がこの選択的なバイアスを作り出していると説明し、これらの研究の統一的な解釈を試みている。この視点から Banaji & Greenwald(1995)の結果を説明すると、判断対象が男性名である場合、「熟知感は有名性を示唆する」というヒューリスティックが適用されやすかったため、旧項目の非有名な名前が有名であると判断されたが、女性名であるとそうしたヒューリスティックは適用されにくく疑似有名性効果が生じなかったのである。すなわち、ジェンダーステレオタイプによって、「熟知感は有名性を示唆する」というヒューリスティックの適用可能性の程度が変わり、選択的な疑似有名性効果が生じたのである。

また、熟知感は、有名度ばかりでなく、ステイトメントの主観的な妥当性にも影響を与える。Arkes, Boehm, & Xu(1991)では、繰り返し呈示されたステイトメントは、そうでないステイトメントと比べ、その妥当性が高く評定された。事前接触は、再びそのステイトメントに接触したときの熟知感を高め、それがステイトメント自体のもつ妥当性の高さとして知覚されることが示された。ここでは、「熟知感のある命題は真実性が高い」という素朴な経験知が適用されたといえる。

さらに、Skurnik(1998; Skurnik *et al.*, 2000より引用)は実験的な操作を加え、熟知感と虚偽性を結びつける知識を一時的に作り出すことで、熟知感から偽り判断が導かれうることを示すことに成功した。実験手続きは以下の通りである。CRT 画面上に、ステイトメントが呈示され、同時にそれが真か偽かが示された。最初に呈示されるリストは、ステイトメントの 2/3 が真の条件と、2/3 が偽の条件とに分けられた。2 番目に呈示されるリストでは、半数ずつ真偽のステイトメントが呈示された。最後の課題として、第2のリストの中に新しいステイトメントが混入しているものが見せられ、被験者は、どのステイトメントが「第2のリストにあった真」であるか、「第2のリストにあった偽」であるか、あるいは「新」であるかを判定させられた。結果、最初のリストが、2/3 が「真」の条件であった場合、「2度目の偽」を「真」だとする率が、「新しいステイトメント」を「真」だとする率と、「2度目の真」を「偽」だとする率よりも高かった。一方、2/3 が「偽」の条件であった場合、「2度目の真」を「偽」だとする率が、「新しいステイトメント」を「偽」だとする率と、「2度目の偽」を「真」だとする率よりも高かった。前者では、2度目に接触したステイトメントに対して経験する熟知感を、先のリストで「真」であったことの信号として解釈されたが、後者では、逆に、それが、「偽」であったことの信号として解釈されたのである。つまり、最初のリストに「偽」が多かった条件では、熟知感と「偽」が結びついた知識が形成され、それが主観的経験の含意を推測するときに利用されたのであるといえる。経験される感覚自体は同じでも、そこから引き出される推論が異なると、判断も異なるということが示されたと言える。

Banaji & Greenwald(1995)は、判断対象を操作することでヒューリスティックの適用可能性の程

度を变化させ、疑似有名性効果の選択的バイアスを示したのであるが、Skurnik(1998)は、熟知感に対し適用されるヒューリスティックそれ自体を、実験的操作で变化させ、熟知感から真実性の逆の判断が導かれることを示した。このように、主観的経験は、それに適用される素朴な信念やステレオタイプといった、その源泉に関する暗黙の知識のタイプによってその含意を変え、後続の判断に選択的、あるいは反対の効果を与えるのである。

また、ここでは触れなかったが、熟知感とそのメタ認知は、有名性・真実性ばかりでなく、他の様々な主観的判断に取り込まれる(再認: Jacoby & Dallas, 1981; 呈示時間の長さ: Witherspoon & Allan, 1985; ノイズの大きさ: Jacoby, Allan, Collins, & Larwill, 1988; 過去記憶: Whittlesea, 1993; 課題の容易さ: Jacoby & Kelley, 1987)。様々な判断の材料として利用されることから、熟知感の情報としての含意は、文脈、すなわち、課題の性質によって変化することがわかる。被験者の焦点の当てる刺激の属性が異なれば、主観的経験との関係も変化し、そこで適用される知識も変わってくるのである。

情動・認知の処理の順序性 - 単純接触効果を材料に -

単純接触効果とは、特定の対象をただ繰り返し経験するだけで、その対象に対する好感度、愛着、選好性などが増大する現象のことを言う。歴史的に見ると、Zajonc らの単純接触効果に関する一連の研究 (Moreland & Zajonc, 1976, 1977; Kunst-Wilson & Zajonc, 1980) は、情動経験の成立には認知的評価が必要条件となるという Schachter らの情動 2 要因理論と相反する主張となった。Zajonc らは、単純接触効果を、意識性あるいは認知的関与の低いところで、情動体験が成立する証拠としたのである。しかし、近年、単純接触効果を知覚的流暢性の誤帰属としてとらえる立場が出現し、Zajonc らの主張の妥当性を見直す契機となった。

情動先行の証拠としての単純接触効果

Moreland & Zajonc(1977)は、被験者に、呈示回数の異なる(0回, 1回, 3回, 9回, 27回)無意味図形を呈示した後、その図柄に対する好意度、あるいは熟知度や再認確信度といった再認の判断を求めた。重回帰分析の結果、好意判断をよく説明したのは、再認能力よりも、むしろ客観的な刺激の呈示回数であった。また、線形構造方程式分析の結果、認知 - 情動独立モデルの整合度指標のほうが、認知媒介モデルのそれと比べ、データとの当てはまりがよかった。さらに、Kunst-Wilson & Zajonc(1980)は刺激の認知閾を操作し、情動反応との関連を検証した。すなわち、ターゲット図形を閾下で 5 回呈示した後、被験者は新項目と対にされたターゲット図形を呈示され、どちらが先に呈示されたか(再認判断)、あるいはどちらが好ましく感じられるか(好意度判断)を答えさせた。結果、強制択一式の再認課題では、旧項目の選択率が 48%であったのに対して、強制択一式の好意度評定では、旧項目が 60%の確率で選択された。

一連の研究から、Zajonc らは、客観的な接触回数が刺激に対する好意的態度を直接的に(認知プロセスを経ず)促進すると結論した。すなわち、単純接触効果によって得られる好意の増大は、認知的関与の殆どないピュアーな情動反応であり、帰属のような認知的機能とは独立した反応だとされた。

認知的誤帰属としての単純接触効果

情動が認知に先行するという立場を擁護する Zajonc らの主張は、認知と情動に関する基本的な処理過程の順序性についての論争を巻き起こした(論争の詳細な経緯については、池田, 1994; Cornelius, 1996; 加藤, 1998)。彼らの論点に対する批判は数多い。Bornstein らは、単純接触による好意の増大は、知覚的流暢性の誤帰属が、その原因であるとした(Bornstein, 1989; Bornstein & D'Agostino, 1992; 1994)。単純接触効果を純粋な感情反応の現れとしてではなく、感情価にお

いてニュートラルな認知的経験の誤帰属から構成された、感情反応であると主張したのである。刺激の反復接触は、再びその刺激に接触した際に、処理の流暢性を高めるが、その経験は熟知感を潜在的にもたらし、それが刺激の客観的属性に対する好意的な反応であると認識されることで、高い好意を得るのだとされた。彼らは、過去に接触した人物や図形は、そうでない対象と比べ、熟知性が高く感じられ、それをそもそも刺激が備える属性への好意的な反応と誤認することで作りあげられる、好意の増大であると考えたのである。

Bornstein (1989) は、単純接触効果に関する 134 編の論文をメタ分析した結果、刺激が閾上で呈示される場合、最初の接触から判断までの時間的間隔が長いほどその効果が促進されること、また、刺激が閾上で呈示されるよりも、閾下で呈示された場合のほうが、その効果が強く得られることを見出した。再認が妨げられる条件であるほど、強力な効果が生じる可能性を示唆したといえる。

Bornstein & D'Agostino (1992) では、このメタ分析の結果が実験的に検証された。具体的には、呈示回数 (0 回, 1 回, 5 回, 10 回, 20 回) と呈示時間 (5ms, 500ms) の異なる刺激に対して、再認判断と好意度判断が求められた。結果、再認課題では、呈示回数が増えるにつれ、閾上刺激の再認率は高まったが、閾下条件では再認率に変化は見られなかった。しかし、好意度判断では、閾下条件の刺激への好意の上昇は、閾上条件におけるそれよりも、大きかった。単純接触効果が、閾上よりも、閾下でその効果が強いということが直接的に示されたのである。

潜在記憶が熟知感などの主観的経験に影響を与え (Jacoby & Kelley, 1987; Bonnano & Stillings, 1986)、そのシステムが再認や再生を支える顕在記憶システムと独立している点や、経験済みの刺激を選択するという現象は好意判断に限定されることがなく、「明るさ」や「暗さ」といった判断領域においてもその効果が得られる (Mandler, Nakamura, & Van Zandt, 1987) ことから、Bornstein らは、単純接触効果の根底に働くメカニズムが、疑似有名性効果などと同じく、知覚的流暢性の誤帰属ではないかと考えた。そして、単純接触効果が、知覚的流暢性の誤帰属によって説明されるなら、操作的に帰属のエラーを導くことで、その効果に割引や割増と同様の現象が得られると予測し、それを直接的に検証した (Bornstein & D'Agostino, 1994)。

Bornstein & D'Agostino (1994; Exp1) では、教示によって帰属の操作をすることで、閾下呈示 (5ms) での単純接触効果が割り引かれることが示された。新項目、旧項目それぞれの刺激に対する好意度を評定させる前に、3 分の 1 の被験者には、ターゲットが先の課題で呈示させられていたという教示がされ (Old 条件)、別の 3 分の 1 の被験者には、ターゲットが先の課題で呈示されなかったという教示がされ (New 条件)、残りの 3 分の 1 の被験者には、特に何も伝えなかった (Standard 条件)。結果、全ての条件を通して、旧項目は、新項目と比べ、好意度が高く評定されたが、Old 条件では、他の 2 条件と比べ、評定値が低くなった。また、Old 条件では、旧項目への好意度は、コントロール条件で得られたベースラインと有意な差が生じなかった。「既に見た」という教示が与えられることで、被験者は意識的な修正を行い、熟知感を先行課題の効果へ帰属したのである。さらに、Bornstein & D'Agostino (1994; Exp2) では、呈示時間を変え (100ms)、同様の手続きで実験をしたところ、その効果が、New 条件では、割増されることが示された。新項目に関しては、3 条件及びコントロール条件でその評定値に差は生じなかったが、旧項目に関しては、New 条件での好意度は、他の条件と比べ、高く評価された。「実際には見ていない」という教示が与えられることで、被験者は、熟知感を先行課題へ帰属することを避け、刺激自体の持つ好ましさに帰属したのである。すなわち、閾下呈示であっても、知覚的流暢性を先行課題へ帰属すれば、評定値は下がり、閾上呈示であっても、知覚的流暢性を先行課題へ帰属できなければ、評定値があがるということから、単純接触効果には、高次の認知過程が関与していることが示された。

Bornstein らは一連の研究から、潜在記憶の働きであることを知らない(実際、ある刺激に接触したことを覚えていない)被験者は、熟知感の源泉を、刺激の属性に求めてしまうのであると結論した。つまり、好意の増大は、熟知感と刺激に対する内的な好意的反応とのすり替えの結果であり、それはピュアーな感情反応ではありえないと主張したといえる。

両者の見解の限界と知覚的流暢性の感情価に関する問題

再認不能であるが事前接触のある刺激に対して情動反応が得られることに関して、Zajonc らは、まさにそのことをもって情動が認知に先行する証拠であると考えたのに対して、Bornstein らはそれを潜在記憶の働きと自動的な帰属プロセスによって説明したのである。ここから、両者は「認知」に関する定義を共有していないと言えるが、他の研究結果から、両者の主張が不十分であり、訂正されるべきものであることが示唆される。Mandler *et al.* (1987) では、知覚的流暢性の源泉は、被験者が焦点を向けた対象の属性には何にでも帰属される可能性が示唆された。閾下で図形を呈示した後、新項目と旧項目を対に呈示し、より「明るい」ないしは「暗い」方を選択させると、旧項目がより選択されるという結果が得られたのである。すなわち、感情的判断ばかりでなく、明暗といった評価的な判断において、経験済みの刺激が選択される傾向があったのである。すなわち、Kunst-Wilson & Zajonc (1980) での結果が感情的判断に限定されない、つまり、それが感情先行説の証拠とならないことが示されたのである。

しかし、同時に、Mandler *et al.* (1987) では、感情判断においても、それが「嫌悪度」を求める判断であると、経験済みの刺激が選択されるという結果は生じないということが示された。被験者は、好意度判断を求められている限り、新奇刺激よりも旧刺激を選択する傾向があったが、どちらが嫌いかを判断させると両者に差は生じなかったのである。これは Bornstein らも指摘している点ではあるが (Bornstein & D'Agostino, 1994, Pp130)、知覚的流暢性が帰属される感情価の方向が、その可変性に制約を与えるという可能性が示されたといえる。感情的判断において非相称的な帰属パターンが得られるということから、知覚的流暢性はいかなる属性にも帰属されるという想定は正しいとは言えなくなる。知覚的流暢性誤帰属における感情価の非相称性は、純粋な感情反応としての単純接触効果を否定できるかどうかという問題に通じる。というのも、ネガティブ判断で単純接触効果が生じないということから、熟知感ひいては知覚的流暢性がそもそもポジティブな感情価を有している可能性が導かれるからである (Smith, 2000; Reber, Winkielman, & Schwarz, 1998; Garcia-Marques & Mackie, 2000)。すなわち、ここからは、単純接触効果が単なる認知的な誤帰属であると結論付けることができなくなるのである。

Smith (2000) は進化論的視点から、熟知感がポジティブな感情価を有するであろうことを主張した。彼によれば、熟知感とは、記憶システムから生み出される、個体のおかれた環境の安全性を示す信号である。すなわち、対象が新奇であるかそうでないかを即座に判断する能力は個体の生存率を高める。熟知感とは環境が安全であることのシグナルであり、ポジティブな感情価を有する。逆に、新奇性は、環境が安全であることのシグナルとはならないので、ポジティブな感情価は伴わない。

Reber *et al.* (1998, Exp2, Exp3) は、知覚的流暢性それ自体のバレンスがニュートラルであるかポジティブであるかを検証した。彼らは、もし知覚的流暢性の感情価がニュートラルであればポジティブな方向で質問されれば、それはポジティブな刺激特性へ帰属されるし、ネガティブな形で質問されても、それはネガティブな刺激特性へ帰属されるが、逆に、感情価がポジティブであれば、誤帰属が生じるのはポジティブ判断に対してだけであろうと考えた。

Reber *et al.* (1998, Exp2) では、コントラストの強度が、視覚刺激に対する「きれいさ (prettiness)」判断 (ポジティブ条件) と「みにくさ (ugliness)」判断 (ネガティブ条件) にどのような影響を与えるかを

調べた。すなわち、図と地のコントラストを変化させることで、処理の流暢性を操作した。高コントラスト画像は明瞭に見えるので、流暢な処理が期待されるが、低コントラスト画像は期待できない。結果は、ポジティブ判断では、コントラストが高まるほど、刺激は「きれい」と評定されたが、ネガティブ条件ではコントラストが高まっても、より「みにくい」という評定はされず、むしろ「みにくい」という評価はコントラストが高まるにつれ低下していった。Reber *et al.* (1998, Exp3) では、呈示時間 (100ms, 200ms, 300ms, 400ms 条件) が、視覚刺激に対する「好意度 (liking)」判断 (ポジティブ条件) と「嫌悪度 (disliking)」判断 (ネガティブ条件) にどのような影響を与えるかが検証された。視覚刺激の呈示時間が長いほど、入力情報が多くなり流暢性が高まるとされた。結果は、ポジティブ判断では、呈示時間が長くなるほど、その評定が高まったが、ネガティブ判断では、呈示時間が長くなるほど評定は低くなる (嫌いではない方向へ評定される) 傾向があった。

Garcia-Marques *et al.* (2000) は、熟知感とはポジティブな感情のトーンを帯びるということと、熟知感とムードは機能的に同一であることを 3 つの実験を通して示した。最初の実験では、事前接触回数の異なるステイトメントの真実性の評定を求めたところ、多く呈示されたものほど、その真実性が高く評価されたが、同時に被験者のムードも測定したところ、複数回呈示条件でよりポジティブなムードが報告された。すなわち、刺激への反復接触が、典型的な熟知性による効果ばかりではなく、ポジティブなムードも作りだしたのである。

第 2 実験では、新聞記事によって誘発されたポジティブ (あるいはニュートラル) なムードが、その後の課題であるステイトメントの真実性評定に影響を与えることが示された。被験者は、記事を読んだ後、別の研究 (潜在的処理の研究) と称される実験で、CRT 画面でフラッシュを呈示され、その後の質問に答えたが、そのとき、フラッシュに 2 つの短い文章が含まれているという偽りの指示が告げられていた。結果、ポジティブムードを誘発させられていた被験者の 65% 以上が、2 つの文章に対し、「正しい」と反応したのに対し、ニュートラル条件の被験者の 63% が「誤っている」と答えた。被験者はポジティブなムードを、(実際には呈示されていない) ステイトメントの真実性の診断性を示す手がかりとして利用したのである。

最後の実験では、ムードが説得的メッセージの処理様式に影響するのと同様に、熟知感も説得的メッセージの処理様式に影響を与えることが示された。具体的には、論調の強さが異なる反態度的メッセージの説得効果が、事前に聴覚的に接触したことで増大する熟知感の違い (0, 1, 2, 4 回呈示条件) に影響を受けるかどうか検証された。反復呈示 (熟知性あり) 条件は、ポジティブなムードを誘発しヒューリスティックな処理を促進するので、その論調の強弱は態度変化に影響を与えることはないが、逆に、0 呈示 (熟知性なし) 条件では、システムティックな処理が発動するので、態度変化はメッセージの論調の強弱に依存するであろうと仮説がたてられた。結果は予測どおりであり、反復呈示条件の被験者は論調の強弱によって態度変化に差は見られなかったが、0 呈示条件の被験者は、より説得的なメッセージにたいして、態度変化が大きくなった。

整理すると、最初の実験では、反復呈示がステイトメントの妥当性 (熟知感の誤帰属) ばかりではなく、ポジティブムードも誘発することが示された。2 つめの実験では、ポジティブなムードが主観的妥当性を高めることが示され、最後の実験では、熟知感がポジティブムードと同じくシステムティック・ヒューリスティック処理を切り替える機能があることが示された。3 つの実験を通して、彼らは、熟知感のポジティブ感情との機能的な同一性を主張したのである。

知覚的流暢性または熟知感が、ポジティブな感情価を有する可能性を示唆するこれらの実験結果は、Bornsteinらのモデルにおける感情価の中立性に関する暗黙の想定に再検討を迫るものといえよう。しかし、ネガティブな方向で誤帰属が生じないということから、知覚的流暢性が本来的にポジティブ

であるという結論を導くのは短絡的であるように思われる。知覚的流暢性誤帰属の典型例に、疑似有名性効果と真実性判断があったが、前者に関してはそれがジェンダーステレオタイプによって選択的バイアスを示すということ、後者に関しては虚偽性判断が導かれ得るということが実証されている。つまり、主観的経験が判断に取り込まれる際、ヒューリスティックのターゲットへの適用可能性が選択的バイアスを示すこと、あるいは適用されるヒューリスティックのタイプによって全く逆の判断が導かれることが示された。このような視点に立つと、単純接触効果においてネガティブな判断が得られない理由が、ヒューリスティックのタイプやその適用可能性に求められるかもしれない。つまり、知覚的流暢性が感情価においてニュートラルであるという可能性は排除されなくなるといえる。今後の課題として、判断対象によっては知覚的流暢性がネガティブな特性として感じられる可能性、知覚的流暢性をネガティブな信号として説明するヒューリスティックの存在可能性を実験的に検証する必要があるといえよう。

最後に

われわれの行為や決定の多くが、潜在的プロセスから強力な影響を受けており、結果、様々なエラーやバイアスから逃れられないという知見は、人間が非合理的な生き物であるということの意味しない。現実生活に適応していくには、意思決定の多くを、迅速で効率的な処理過程に委ねる必要があり、それらの決定を熟慮的な思考に頼ることは、脳損傷患者の事例からも分かるように、かえって個体にとって好ましくない結果をもたらすことさえあるのである。また、無意識的な推論から産出された結果である意識的経験は、個体にとって意味のある形で世界が構成された結果でもあり、それは世界の複雑な現象を予測し、適切な行動を選択することを可能とする前提ともなるのである (Dennet, 1996)。すなわち、エラーやバイアスといった非合理性を個体にもたらすメカニズムは、同時に適応的な恩恵をもたらすという別の合理性も備えているのである (Evans & Over, 1996)。また、意識が関与しない過程に行動の多くが縛られるということは、人間が自由意思を持たない機械の親縁者であるという結論も導かない。確かに、生物学的因果と文化はしばしば陰に陽にわれわれの推論を決定づけ、それゆえ個としての自由の行使を制限しているようだが、人間にはそのような制約に抗して行動を意図し、実行する余地がある (Damasio, 1994)。生物学的、文化的制約からの解放が、崇高な業績あるいは狂気を生み出していることは明らかである。

錯視研究から人間の視覚システムの理解が深まったように、より高次の認知的作業あるいは感情経験におけるバイアスや誤帰属といわれる現象の研究から、人間の一般的な思考・感情過程、ひいては社会的脈絡の中での人間の行動について多くを学ぶことができる。エラーやバイアスは、人間が実際にどのように感じ、考え、振る舞うのかについて多くの実証的証拠を心理学者に提供するのである。そして、エラーやバイアスといわれる現象の多くが、潜在的・自動的な認知プロセスによって導かれていることはもはや疑う余地はなくなっている (Uleman & Bargh, 1989; Bornstein & Pittman, 1992; Chaiken & Trope, 1999)。ここから、規範的な科学に対し、記述的な科学としての性質を有する心理学は、従来以上に、人間行動の潜在的過程に焦点をあてたアプローチを採用すべきであるといえよう。また、無意識的過程を扱うことは、個人の行動や決定を規定する隠れた影響への盲目状態からの脱却をもたらし、個人の心と体に関する自主的責任の範囲を見つめ直す重要な材料を提供するのである。

引用文献

- Arkes, H.R., Boehm, L.E., & Xu, G. 1991 Determinants of judged validity. *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 576-605.

- Banaji, M.R., & Greenwald, A.G. 1995 Implicit gender stereotyping in judgments of fame. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 181-198.
- Bem, D.J. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 6, New York: Academic Press. Pp. 1-60.
- Bless, H., & Forgas, J.P. (Eds.) 2000 *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia: Psychology Press.
- Bonnano, G.A., & Stillings, N.A. 1986 Preference, familiarity and recognition after repeated brief exposures to random geometric shapes. *American Journal of Psychology*, **99**, 403-449.
- Bornstein, R.F. 1989 Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968-1987. *Psychological Bulletin*, **106**, 265-289.
- Bornstein, R.F., & D'Agostino, P.R. 1992 Stimulus recognition and the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 545-552.
- Bornstein, R.F., & D'Agostino, P.R. 1994 The attribution and discounting of perceptual fluency: Preliminary tests of a perceptual fluency/attributional model of the mere exposure effect. *Social Cognition*, **12**, 103-128.
- Bornstein, R.F., & Pittman, T.S. (Eds.) 1992 *Perception without awareness: Cognitive, clinical, and social perspectives*. New York: Guilford Press.
- Chaiken, S., & Trope, Y. (Eds.) 1999 *Dual-process theories in social psychology*. New York: The Guilford Press.
- Chen, S., & Chaiken, S. 1999 The heuristic-systematic model in its broader context. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford Press. Pp. 73-96.
- Clore, G. 1992 Cognitive phenomenology: Feelings and the construction of judgment. In L.L. Martin & A. Tesser (Eds.), *The construction of social judgments*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 133-163.
- Clore, G., & Parrott, W. 1994 Cognitive feelings and metacognitive judgments. *European Journal of Social Psychology*, **24**, 101-115.
- コーネリアス R.R. 齊藤勇 (監訳) 1999 感情の科学: 心理学は感情をどこまで理解できたか 誠信書房 (Cornelius, R.R. 1996 *The science of emotion: Research and tradition in the psychology of emotions*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall, Inc.)
- デネット D.C. 土屋俊 (訳) 1997 心はどこにあるのか 草思社 (Dennett, D.C. 1996 *Kinds of minds: Toward an understanding of consciousness*. New York: Basic Books.)
- ダマシオ A.R. 田中三彦 (訳) 2000 生存する脳 心と脳と身体の神秘 講談社 (Damasio, A.R. 1994 *Descartes's error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Avon Books.)
- エヴァンス J.St.B.T., & オーヴァー D.E. 山祐嗣 (訳) 2000 合理性と推論 人間は合理的な思考が可能か ナカニシヤ出版 (Evans, J.St.B.T., & Over, D.E. 1996 *Rationality and reasoning*. Hove: Psychology Press.)
- Garcia-Marques, T., & Mackie, D.M. 2000 The positive feeling of familiarity: Mood as an information processing regulation mechanism. In H. Bless & J.P. Forgas (Eds.), *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia: Psychology Press. Pp. 240-261.
- Greenwald, A.G., & Banaji, M.R. 1995 Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A.G., Banaji, M.R., Rudman, L.A., Farnham, S.D., Nosek, B.A., & Mellot, D.S. in Press A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*.
- Higgins, E.T. 1989 Knowledge accessibility and activation: Subjectivity and suffering from unconscious sources. In J.S. Uleman, & J.A. Bargh (Eds.), *Unintended thought*. (pp. 75-123). New York: Guilford Press.
- Higgins, E.T. 1996 Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience In E.T. Higgins, & A.W. Kruglanski (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles* New York: Guilford Press. Pp. 133-168.
- 池上知子 1999 社会的適応システムとしての潜在記憶 心理学評論, **42**, 243-256.
- 池田謙一 1994 感情・情動の社会心理学 岩波講座 認知科学 6 情動 岩波書店 Pp. 173-202.
- Jacoby, L.L., & Dallas, M. 1981 On the relationship between autobiographical memory and perceptual learning. *Journal of Experimental Psychology: General*, **110**, 306-340.
- Jacoby, L.L., & Kelley, C.M. 1987 Unconscious influences of memory for a prior event. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 314-336.
- Jacoby, L.L., Allan, L.G., Collins, J.C., & Larwill, L.K. 1988 Memory influences subjective experience: Noise judgments. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **14**, 240-247.

- Jacoby, L.L., Kelley, C., Brown, J., & Jasechko, J. 1989 Becoming famous overnight: Limits on the ability to avoid unconscious influences of the past. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 326-338.
- 加藤和生 1998 認知と情動のからみ: 「認知が先」か「情動が先」か 丸野俊一(編) シリーズ 心理学のなかの論争 [1] 認知心理学における論争 ナカニシヤ出版 Pp.55-82.
- Kunst-Wilson, W.R., & Zajonc, R.B. 1980 Affective discrimination of stimuli that cannot be recognized. *Science*, **207**, 557-558.
- Mandler, G., Nakamura, Y., & Van Zandt, B.J. 1987 Nonspecific effects of exposure on stimuli that cannot be recognized. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **13**, 646-648.
- Moreland, R., & Zajonc, R. 1976 A strong test of exposure effects. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 170-179.
- Moreland, R.L., & Zajonc, R.B. 1977 Is stimulus recognition a necessary condition for the occurrence of exposure effects? *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 191-199.
- Murphy, S.T., & Zajonc, R.B. 1993 Affect, cognition, and awareness: Affective priming with optimal and suboptimal stimulus exposures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 723-739.
- Nisbett, R., & Wilson, T. 1977 Telling more than we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, **84**, 231-259.
- 信原幸広 2000 考える脳・考えない脳 講談社
- Reber, R., Winkielman, P., & Schwarz, N. 1998 Effects of perceptual fluency on affective judgments. *Psychological Science*, **9**, 45-48.
- Schachter, S., & Singer, J. 1962 Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, **69**, 379-399.
- Schwarz, N. 1998 Accessible content and accessibility experiences: The interplay of declarative and experiential information in judgment. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 87-99.
- Schwarz, N., & Clore, G. 1983 Mood, misattribution, and judgments of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 513-523.
- Schwarz, N., & Clore, G. 1996 Feelings and phenomenal experiences. In E.T.Higgins, & A.W.Kruglanski(Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles*. New York: Guilford Press. Pp.433-465.
- Schwarz, N., Bless, H., Strack, F., Klumpp, G., Rittenauer-Schatka, H., & Simons, A. 1991 Ease of retrieval as information: Another look at the availability heuristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 195-202.
- 下條信輔 1996 サブリミナル・マインド 中央公論社
- Skurnik, I. 1998 Metacognition and the illusion of truth. Unpublished doctoral dissertation, Princeton University (Skurnik, I., Schwarz, N., & Winkielman, P. (2000) より引用)
- Skurnik, I., Schwarz, N., & Winkielman, P. 2000 Drawing inferences from feelings: The role of naive beliefs. In H. Bless, & J.P.Forgas(Eds.), *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia: Psychology Press. Pp.162-175.
- Smith, E.R. 2000 Subjective experience of familiarity: Functional basis in connectionist memory In H. Bless, & J.P.Forgas(Eds.), *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia: Psychology Press. Pp.109-124.
- Strack, F. 1992 The different routes to social judgments: Experiential versus informational based strategies. In L.L.Martin, & A.Tesser(Eds.), *The construction of social judgments*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.249-275.
- Strack, F., & Bless, H. 1994 Memory for nonoccurrences: Metacognitive and presuppositional strategies. *Journal of Memory and Language*, **33**, 203-217.
- Strack, F., & Förster, J. 1998 Self-reflection and recognition: The role of metacognitive knowledge in the attribution of recollective experience. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 111-123.
- Storms, M., & Nisbett, R. 1970 Insomnia and the attribution process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 319-328.
- Toth, J.P. 2000 Nonconscious forms of human memory. In E.Tulving, & F.I.M.Craik(Eds.), *The Oxford handbook of memory*. New York: Oxford University Press. Pp.245-261.
- 外山みどり 1990 「自己の姿の把握」の段階 中村陽吉(編) 自己過程の心理学 東京大学出版会 Pp.67-110.
- Tversky, A., & Kahneman, D. 1973 Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, **5**, 207-232.
- Uleman, J.S., & Bargh, J.A.(Eds.) 1989 *Unintended thought*. New York: Guilford Press.
- Wänke, M., Schwarz, N., & Bless, H. 1995 The availability heuristic revisited: Experienced ease of retrieval

- in mundane frequency estimates. *Acta Psychologica*, **89**, 83-90.
- Witherspoon, D., & Allan, L.G. 1985 The effect of a prior presentation on temporal judgments in a perceptual identification task. *Memory and Cognition*, **13**, 101-111.
- Whittlesea, B.W.A. 1993 Illusions of familiarity. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **19**, 1235-1253.
- Zillman, D., Katcher, A.H., & Milavsky, B. 1972 Excitation transfer from physical exercise to subsequent aggressive behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **8**, 247-259.

註

- ¹⁾ 本稿では「ヒューリスティック」を2つの意味で使用する。すなわち、一般に広く受け入れられている簡便な処理様式としての意味と、学習を通し記憶の中に貯蔵されたある種の判断規則・知識という意味である。
- ²⁾ ここでは、「情動感覚」に、生理的喚起から感情やムードまで、情動経験に関連する内的な感覚を広く含める。

The Misattribution and Primacy of Processing of Emotion and Cognition

Ayumi YAMADA (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

The tendency to misattribute particular sources of subjective experiences to other irreverent sources is ubiquitous over psychological processes including most aspects of emotion and cognition. The ubiquity reflects the ignorance of the sources of subjective experiences, which emanate directly from consciously inaccessible processes. As a consequence, the ignorance of them biases emotions and thoughts. In this article, a diverse body of research on the misattributions will be reviewed, focusing on the role of metacognition which monitors subjective experiences, infers their sources, and interprets their implications. Discussion follows on the problems with which mere exposure effect, assumed originally as an empirical evidence of affective primacy, is conceptualized in terms of the misattribution of cognitive experiences.

Key words: misattribution of affective feeling, availability heuristic, perceptual fluency misattribution, mere exposure effect, primacy of processing